

日系アメリカ人と第二次世界大戦

—強制収容の背景と戦後補償による現代への影響—

人文学部 現代社会課程 国際社会コース
三上弥理

本論文は、第二次世界大戦下のアメリカ合衆国において、西海岸に居住していた約 12 万人の日系人が強制収容された歴史的背景や、連邦政府や議会、最高裁までもがこの政策を推し進めることになった根拠である差別的価値観とそこから生じる政治的・経済的影響力を考察し、また戦時中の経験を克服した戦後の日系社会の活動などから、強制収容の前後で日系社会の社会的地位がどのように変化し、それが現代のアメリカ社会においていかなる影響力を持つのかを論じるものである。

日系人強制収容に関する先行研究は各時期、各地域、442 部隊や最高裁の判決、個人の体験談や俳句など、細かな分野までとても充実しているが、現代の社会に関連させて議論が展開されているものは少ない。その点から考えると、トランプ政権のもと、さまざまな差別が問題となっている現代アメリカ社会において、日系人の経験から学べることは十分にあるだろう。さらに、在日韓国・朝鮮人や昨今の外国人労働者受け入れ拡大の問題などを抱えているにもかかわらず、私たち日本人はまだまだ差別に対する意識が低いように思われる。日系アメリカ人の経験やその存在意義はアメリカだけでなく日本にとっても重要なのである。

第一章では、イギリス領植民地の時代から連続する人種的価値観の形成や、そこから生まれる差別的価値観とそれに付随する政治的・経済的影響との相互作用を概観することで、日系人に限定された人種差別的政策が実施される背景について考察した。入植当初からアングロサクソン系の文化が中心となり、少数派のヨーロッパ系移民はそれを受容し順応する一方、ネイティブアメリカンを徹底排除し黒人を奴隷として扱うことで、白人至上主義的な価値観が形成されていった。その黒人に代わり新たに安価な労働力として注目されたのが、アジア系移民のパイオニアとなる中国系移民である。安価ゆえに、経済的に競合する白人労働者層には排斥感情が生まれ、白人至上主義の観点に基づき連邦議会までもが差別的な法律を成立させていった。日系移民はこれら中国系移民から連続する反東洋人感情をそのまま受け、農業における成功によってより反発を招いていった。さらに日本が太平洋地域で軍事的脅威を強めていたことにより、アメリカ国内の反日扇動は政治的影響力を増していく。反日扇動のピークが大統領選の年と重なることから分かるように、政治家は反日本人感情を利用するようになり、このことは強制収容の背景として重要となる。

第二章では、真珠湾攻撃後アメリカ政府がどのような判断で強制収容を実行したのか、また日系社会にとって被害とはどのようなものだったのか考察した。FBI や様々な情報網からローズヴェルト大統領は日系社会の軍事的危険性は極めて低いと知りながら、カリフ

オルニア州議会や日系人と競合する農業団体による圧力により、軍に対し西海岸の軍事地帯からすべての脅威を排除する権限=日経人強制収容の許可を与えるに至った。しかし、その圧力の主な根拠は日系人に対する人種的偏見だったのである。強制収容の期間中に日系人の処遇で最も影響を及ぼしたのが「忠誠」である。政府は収容所内の日系人に対し、忠誠質問に答えることで陸軍への志願やより早期の出所を認めたが、ある程度の日本語や文化を理解している日系人は軍にとって数以上の戦力になり、収容所を管理する側にとっては不忠誠者を選別することで運営の負担を緩和できる狙いがあった。こうした忠誠審査は日系人の間に複雑な対立を引き起こし、軍に志願する者もいれば、不忠誠者が隔離されたトゥールレイク収容所では、反米グループによってアメリカ国籍者に対して市民権を放棄させる運動が活発化した。日本の降伏後ようやく日系人の解放が始まったが、依然西海岸では排日感情が強く、暴力をはじめとする様々な差別が続いた。

第三章では、強制収容に闘いを挑んだゴードン・ヒラバヤシ、フレッド・コレマツ、ミツエ・エンドウの3人の最高裁判決を取り上げた。ヒラバヤシは夜間外出禁止令違反、コレマツは立ち退き命令に対する違反で有罪となったが、強制収容の是非についての審議は一切されなかった。ヒラバヤシ対合衆国事件の判決主文では、血統という根拠だけで市民の間に区別を設けることは嫌悪されるべきものと述べつつも、一方で戦時においてスパイ工作の危機にさらされた地域住民の忠誠に関し、陸軍の精査が要請されていればそのような「区別」は容認できると結論付けた。しかし、実際には「陸軍による精査」は人種偏見に満ちたものであり、それのみに依拠するのは裁判所もその人種偏見を容認したことを意味した。エンドウ事件は無罪判決であったが、それは、収容所を管理していた戦時転住局がすでにエンドウの忠誠が確認されたにもかかわらず継続して拘禁したことを不当としたため、人種差別を問題にしたわけでは全くなかった。司法は一貫して強制収容に触れず、人種差別的な政策を黙認し、戦時における行政府の権限を擁護したのである。

第四章は、戦後における日系社会による補償運動を取り上げ、日系コミュニティ内外への影響を考察した。補償運動は1960年代の黒人公民運動に触発されて発展し、自分たちのエスニックアイデンティティを求める日系三世の世代が中心となった。それに対し二世世代は、金銭的な補償は犠牲を安っぽいものにし、また主流社会から忠誠を疑われる恐れがあると危惧し、そもそも収容の経験を「恥」と捉える傾向が強かった。この世代間の意識の差を解消したのが「追憶の日」と「戦時民間人立ち退き・収容に関する委員会」による公聴会である。1978年11月に「追憶の日」という行事が始まり、仮収容所の跡地内で二世による収容体験談が語られた。公聴会では750人以上が証言し、辛い収容体験を語ることで二世は自らの精神的苦痛を和らげ、初めて親の体験を聞く三世は、証言したことの勇気や、その経験にもかかわらず自分たちを育ててくれた二世の強さに対し、エスニック集団としての誇りを見出した。こうして15年以上の年月を費やし、収容されたすべての日系人に対する政府からの謝罪文と補償金の支払いを認めた「1988年市民的自由法」が制定されたのである。

これまでの考察を踏まえ、日系人強制収容という経験は現代にどのように影響しているだろうか。2001年9月11日、ニューヨークのワールドトレードセンターへのテロ攻撃により、アメリカ国内でアラブ系やムスリムに対する憎悪が高まり、容疑もなく逮捕・拘留される事態が起きた。2017年には、トランプ大統領がイスラム圏などからの入国を禁止する大統領令に署名した。日系社会はこうしたことが起きる度に、日系人の強制収容に対する戦後補償と謝罪を形骸化するものとして激しく反発した。これら日系人の危機感は、人種差別から市民的自由を保護することを意味しており、アメリカ民主主義を守るものと言える。

トランプ大統領が選挙ときに掲げた“America First”という文言には、白人労働者層に向けた意味合いが強く、メキシコや中国系の労働力を問題視する発言も見られた。しかし、“America”の本質は決して白人中心の社会などではなく、異なる背景を持つ者で構成される「移民国家」であり、それぞれの集団に対するアメリカ民主主義による自由や平等の保障が不可欠である。主流社会との経済的対立を煽り、マイノリティの市民的自由を危機にさらすような姿勢は、アメリカの「汚点」を作りかねないということを日系人強制収容の経験から学ぶべきである。

主要参考文献

- 明石紀雄、飯野正子『エスニックアメリカー多民族国家における統合の現実 新版』有斐閣、1997年。
- 東栄一郎『日系アメリカ移民 二つの帝国のはざまで一忘れられた記憶 1868-1945』明石書店、2014年。
- 飯野正子『もう一つの日米関係史—紛争と協調のなかの日系アメリカ人』有斐閣、2000年。
- イノウエ、ダニエル・ケン、ローレンス・エリオット（森田幸夫訳）『上院議員ダニエル・イノウエ自伝—ワシントンへの道』彩流社、1989年。
- 岡部一明『日系アメリカ人強制収容から戦後補償へ』岩波書店、1991年。
- 貴堂嘉之『移民国家アメリカの歴史』岩波書店、2018年。
- 島田法子『日系アメリカ人の太平洋戦争』リーベル出版、1995年。
- タカキ、ロナルド（阿部紀子、石松久幸訳）『もう一つのアメリカン・ドリーム—アジア系アメリカ人の挑戦』岩波書店、1996年。
- （大和弘毅訳）『ダブル・ヴィクトリー—第二次世界大戦は、誰のための戦いだったのか？』柏艸舎、2004年。
- （富田虎男、白井洋子訳）『パウ・ハナーハワイ移民の社会史』刀水書房、1986年。
- 竹沢泰子『日系アメリカ人のエスニシティ—強制収容と補償運動による変遷』東京大学出版会、1994年。
- ダニエルズ、ロジャー（川口博久訳）『罪なき囚人たち—第二次大戦下の日系アメリカ人』

川口博久訳、南雲堂、1997年。
チン、スティーブン・A（金原瑞人訳）『正義を求めて—日系アメリカ人フレッド・コレマツの闘い』小峰書店、2000年。
鶴谷寿『アメリカ西部開拓と日系アメリカ人』日本放送出版協会、1997年。
マックウィリアムス、C（鈴木二郎、小野瀬嘉慈訳）『アメリカの人種的偏見—日系米人の悲劇』新泉社、1970年。
水野剛也『日系アメリカ人—強制収容とジャーナリズム：リベラル派雑誌と日本語新聞の第二次世界大戦』春風社、2005年。
山倉明弘『市民的自由——日系アメリカ人戦時強制収容のリーガルヒストリー』彩流社、2011年。
リーヴス、リチャード（園部哲訳）『アメリカの汚名—第二次世界大戦下の日系人強制収容所』白水社、2017年。

英語文献

Hayashi, Brian Masaru. *Democratizing the Enemy: The Japanese American Internment*. Princeton: Princeton University Press, 2004.
Daniels, Roger. *The Decision to Relocate the Japanese Americans*. Philadelphia: Lippincott, 1975.
———. *The Politics of Prejudice: The Anti-Japanese Movement in California and the Struggle for Japanese Exclusion*. New York: Atheneum, 1977, c1962.

Website

Densho. “Densho: Japanese American Incarceration and Japanese Internment.”
<https://densho.org/>.
Discover Nikkei. “Discover Nikkei: Japanese Migrants and Their Descendant.”
<http://www.discovernikkei.org/en/>.